



公開シンポジウム

三宅島火山災害から7年



主催：日本災害情報学会
東京都立三宅高等学校
後援：東京都三宅支庁
三宅村
三宅村商工会
三宅島観光協会
三宅島漁業協同組合
共催：三宅島人材受入連携協議会



《シンポジウム実行委員会》
実行委員長 干川剛史（大妻女子大学人間関係学部教授）
副委員長 堀切哲弥（東京都立三宅高等学校副校長）
委員 谷原和憲（日本テレビ放送網報道局社会部担当部長）
藤村望洋（早稲田エコステーション研究所代表研究員）
五辻 活（パルシステム生活協同組合連合会）
村上 康（三宅村商工会経営指導担当課長）
前田夏美（三宅島観光協会事務局長）
廣井 慧（NTT-MEネットワークサービス事業本部）
幹事・委員 天野 篤（アジア航測営業統括部担当部長）
学会事務局 中村信郎（日本災害情報学会事務局主管）

プログラム

会場：東京都立三宅高等学校体育館（三宅村坪田）

9月15日（土） ロングシンポジウム

■開会

司会 アジア航測営業統括部担当部長 天野 篤氏
NTT-MEネットワークサービス事業本部 廣井 慧氏

10:00～10:10（10分）

挨拶 日本災害情報学会副会長・北海道大学名誉教授・
NPO法人環境防災総合政策研究機構専務理事 宇井忠英氏

■第1部 噴火から人命を守る： 火山災害時の情報伝達のあり方

10:10～10:35（25分）

基調講演1 三宅島2000年噴火と防災対応
静岡大学教育学部教授 小山真人氏

◎2000年三宅島噴火の学術的評価と情報伝達を火山学者の立場からレビューする。山頂火口の爆発的噴火とカルデラ再生が事前に想定されたか、専門家が先の推移を断言できず避難の決断不全に陥った際、学者・行政・島民間の意思疎通に改善の余地はないのか。厳しい自然環境と共に生きる人間社会と火山との関わりや共生方策などについて、当時、火山噴火予知連絡会委員の一人として全島避難決定にかかわった経験をもとに、わかりやすい解説と問題提起をおこなう。

☆1959年静岡県生まれ。東京大学大学院理学系研究科博士課程修了（理学博士）。日本学術振興会特別研究員、静岡大学理学部助手、静岡大学教育学部助教授、ヌーシャテル大学（スイス）客員研究員などを経て、現在は静岡大学教育学部教授。富士山・箱根山などのハザードマップ検討委員会委員も務めた。専門分野は、火山学・火山防災・歴史地震学。

10:35～11:00（25分）

基調講演2 三宅島噴火への気象庁の対応と新しい火山
防災情報「噴火警戒レベル」
気象庁地震火山部火山課長 横田 崇氏

◎2000年三宅島噴火当時、日夜いかなる検討が繰り返され、判断がごく難しい状況展開の中、何が最善と考え、どう減災にフィードバックされたか、そして、今後の火山防災体制強化に向け、気象庁がいま進めている取り組みなどを紹介する。

☆1955年兵庫県生まれ。東京大学大学院理学系研究科博士課程修了（理学博士）。気象庁に入り、気象研究所研究官をはじめ、地震・火山・津波関連の部署を歴任。伊豆大島、雲仙岳、有珠山、三宅島などの噴火活動に対する観測体制の強化や防災対応等を担当し、富士山ハザードマップの検討に参画。現在、火山課長として火山噴火予知連絡会事務局を担い火山観測・活動評価等の強化に努めている。

11:00～12:00（60分）

パネルディスカッション

コーディネータ 日本テレビ放送網報道局社会部担当部長
谷原和憲氏

パネリスト 静岡大学教育学部教授 小山真人氏

気象庁地震火山部火山課長 横田 崇氏

東京都立府中高等学校・前三宅高等学校教諭 青谷知己氏

三宅村消防団長 平松一成氏

◎2000年6月末から9月頭間の「人命を守る」ための情報と避難対応を率直に検証する。科学的な火山監視観測・予知の限界と離島条件からくる対応の困難などを、専門的な視点から掘り下げる。例えば、帰島の際に盛んにリスクコミュニケーションが語られたが、噴火当時、島民が欲しながらも足りなかったのは何か、体験者である三宅島の方に加わってもらいつまびらかにする。反省点を、現在進行形の新たな噴火警戒レベル、火口カメラなど監視・観測体制整備、火山噴火緊急減災対策など防災対策に反映させることで、災害情報への信頼関係を取り戻し、今度、三宅島や伊豆大島、さらに各地で同様な災害が起きたときどうするか、どうできるか、課題→教訓→改善に向かう道筋をなるべく客観的に示して、火山噴火への備えに活かす。

（昼食60分）

■特別講演

13:00～13:30（30分）

講演 活火山地域における危機管理と共生
～2000年有珠山噴火を例にとって～
日本災害情報学会副会長・北海道大学名誉教授・
NPO法人環境防災総合政策研究機構専務理事 宇井忠英氏

◎噴火予知、長期避難、噴火の推移に応じた対策、次期噴火を見据えた復興、静穏期の心得などを概観し、総合的な視点から火山と麓に暮らす住民の共生にとって、何が重要なポイントとなるのか、1910年や1977-78年噴火の教訓が生かされた2000年有珠山噴火をひもときながら示す。

☆1940年東京都生まれ。東京大学大学院理学系研究科博士課程修了（理学博士）。東京大学理学部助手、米国オレゴン大学火山研究センター研究員、山形大学理学部講師、神戸大学理学部地球科学科助教授などを経て、北海道大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻教授で定年退職。現在、特定非営利活動法人環境防災総合政策研究機構専務理事。専門分野は、火砕流・火山体崩壊・火山災害・火山防災。

■第2部 避難から帰島へ： 被災者生活支援のあり方

13:30～13:55（25分）

基調講演3 三宅島火山災害への三宅村の対応
三宅村村長 平野祐康氏

◎長期避難下でバトンタッチした村長から、村の存続をかけたさまざまな取り組み、全国からの暖かい支援、高濃度火山ガスが差別的に続く中での重い帰島の決断、復旧対応、復興に向けた切実な願いなど、島民のいのちと暮らしを守る立場にある首長より本音の言葉を聞く。

☆1948年東京都生まれ。三宅島で育ち、役場に長年勤め、噴火当時は財政担当。全島避難から3年半以上経った2004年2月、長谷川前村長の病氣退任をうけ村長選に立候補し初当選。島民が14都県に分散避難中の前代未聞の選挙で、年内の帰島を掲げ、得票率約8割の圧倒的な支持で村長に就任した。1962年と1983年と2000年の3回、雄山の噴火を経験し、83年のときは、阿古地区の実家が溶岩流に埋まった。

13:55～15:00（65分）

パネルディスカッション

コーディネータ 大妻女子大学人間関係学部教授
干川剛史氏

パネリスト 関西学院大学災害復興研究所教授
山中茂樹氏

国土交通省九州地方整備局総務部長 湊谷和久氏

地域包括支援センター保健師 小杉真紗氏

三宅島社会福祉協議会事務局長 桑村健司氏

三宅島ふるさと再生ネットワーク会長・
元三宅島島民連絡会会長 佐藤就之氏

◎島外、分散、超長期の避難生活と災害保護（支援法）、ボランティア活動、帰島決断の局面を総括する。最も特徴的で故廣井脩先生も尽力されたところ。いつまで続くか誰もわからない長期避難という特殊性を踏まえつつ、ほかの災害とも対比し、将来、どうすればより望ましいのかを見出す。島しょ部の活火山を多く抱える東京では、数十年ごとに実際に起こり得ることを念頭に、制度的な面を含め、衆知を集めた討議をし、要望的提言へと結びつけたい。都が実施した追加支援策やボランティアの支援活動なども見逃せない。

（休憩15分）

■特別発表

15:15～15:40（25分）

発表1 復興に向けた三宅高校の取組み

東京都立三宅高等学校 生徒

◎次代を担う島の高校生から、復興への三宅高校の取組みと、将来の夢の実現に向けた熱い思いを聞く。とくに三宅高校では、防災教育チャレンジプランに取り組んだり、特産品の開発の研究を進めるなど特色ある教育を行うことで、将来にわたり災害に強く活力ある島づくりを目指しており、大いに期待、応援したい。

15:40～16:00（20分）

発表2 火山・地震研究の最新の知見を現場で共有する
パルシステム生活協同組合連合会・
21世紀型生協研究機構・研究員 五辻 活氏

◎2000年6月、大量のマグマが三宅島から神津島に向かって、海底の岩盤を割り裂きながら走った。このエリア（フィリピン海プレート北端部）で何が起きているのか？、大学の研究室で先進的に調査研究されていることは、実は島の人々の明日の命運に直結する事象に他ならない。最新の知見を「現場」に引っ張ってきて、住民が共有し、ともに考える仕組みを作りたい。CGを駆使したビジュアルな学習拠点・観光拠点として、三宅島「火山・プレートミュージアム」を提案する。

■第3部 復興に向けて： 三世代がバランスよく住める島へ

16:00～17:50（110分）

パネルディスカッション

コーディネータ 早稲田エコステーション研究所
代表研究員 藤村望洋氏

パネリスト 気象庁三宅島測候所長 稲葉和弘氏

三宅村復興政策室長 木村王二氏

東京都立三宅高等学校副校長 堀切哲弥氏

三宅島漁業協同組合専務理事・三宅村議会議員
浅沼徳廣氏

三宅村商工会経営指導担当課長 村上 康氏

NPO法人クリエイティブアイランド理事長
杉本一成氏

三宅島自然ふれあいセンターアカコッコ館
チーフレンジャー 篠木秀紀氏

パルシステム生活協同組合連合会・
21世紀型生協研究機構・研究員 五辻 活氏

◎島民にとって喫緊の切実な願いである経済的生活復興を、具体的かつ建設的に語る。例えば、全国草の根ネットワークを積極的に取り入れるなど、従来にも増して豊かな三宅島再興への道筋を探る。また、島の中学生、高校生にも会場最前列から対話に加わってもらい、これからの魅力ある村づくりと一緒に考える機会とする。

■閉会

17:50～18:00（10分）

挨拶 東京都立三宅高等学校校長 黒澤真木夫氏

■懇親会 坪田公民館・会費制（¥4,000）

司会 三宅村商工会青年部長 飯沼義仁氏

19:00～20:30（90分）

9月16日（日） 三宅島内バス見学会

■現地見学 バス代（¥2,500）

ガイド 東京都立三宅高等学校教諭 前田哲良氏

9:00 坪田発 → 9:30 雄山中腹七島展望台 → 10:00

阿古溶岩流跡 → 10:30 伊豆避難施設（ヘリポート）

→ 11:00 椎取神社泥流跡 → 11:30 三池集落 →

12:00 アカコッコ館 → 13:30 定期船着岸港着

※ 昼食弁当・茶、ガスマスク（S02）は必携

※ 学会・観光協会催行ツアー参加の場合は、バス代、

昼食弁当・茶、およびアカコッコ館入館料を含む

お問合せ 日本災害情報学会事務局

tel: 03-3359-7827
fax: 03-3359-7987

tokio@jasdis.gr.jp 〒160-0011
東京都新宿区若葉1-22 ローヤル若葉505号室

http://www.jasdis.gr.jp/



公開シンポジウム 三宅島火山災害から7年



主催：日本災害情報学会
東京都立三宅高等学校
後援：東京都三宅支庁
三宅村
三宅村商工会
三宅島観光協会
三宅島漁業協同組合
共催：三宅島人材受入連携協議会



《シンポジウム実行委員会》
実行委員長 干川剛史（大妻女子大学人間関係学部教授）
副委員長 堀切哲弥（東京都立三宅高等学校副校長）
委員 谷原和憲（日本テレビ放送網報道局社会部担当部長）
藤村望洋（早稲田エコステーション研究所代表研究員）
五辻 活（パルシステム生活協同組合連合会）
村上 康（三宅村商工会経営指導担当課長）
前田夏美（三宅島観光協会事務局長）
廣井 慧（NTT-MEネットワークサービス事業本部）
幹事・委員 天野 篤（アジア航測営業統括部担当部長）
学会事務局 中村信郎（日本災害情報学会事務局主管）

悪天候時予備プログラム 会場：大妻女子大学（多摩キャンパス）人間関係学部7127教室

9月15日（土） ロングシンポジウム

■開会

司会 アジア航測営業統括部担当部長 天野 篤氏
NTT-MEネットワークサービス事業本部 廣井 慧氏

10:00～10:10（10分）

挨拶 日本災害情報学会副会長・北海道大学名誉教授・
NPO法人環境防災総合政策研究機構専務理事 宇井忠英氏

■第1部 噴火から人命を守る： 火山災害時の情報伝達のあり方

10:10～10:40（30分）

基調講演1 三宅島2000年噴火と防災対応
静岡大学教育学部教授 小山真人氏

◎2000年三宅島噴火の学術的評価と情報伝達を火山学者の立場からレビューする。山頂火口の爆発的噴火とカルデラ再生が事前に想定されたか、専門家が先の推移を断言できず避難の決断不全に陥った際、学者・行政・島民間の意思疎通に改善の余地はないのか。厳しい自然環境と共に生きる人間社会と火山との関わりや共生方策などについて、当時、火山噴火予知連絡会委員の一人として全島避難決定にかかわった経験をもとに、わかりやすい解説と問題提起をおこなう。

☆1959年静岡県生まれ。東京大学大学院理学系研究科博士課程修了（理学博士）。日本学術振興会特別研究員、静岡大学理学部助手、静岡大学教育学部助教授、ヌーシャテル大学（スイス）客員研究員などを経て、現在は静岡大学教育学部教授。富士山・箱根山などのハザードマップ検討委員会委員も務めた。専門分野は、火山学・火山防災・歴史地質学。

10:40～11:10（30分）

基調講演2 三宅島噴火への気象庁の対応と新しい火山
防災情報「噴火警戒レベル」

気象庁地震火山部火山課長 横田 崇氏

◎2000年三宅島噴火当時、日夜いかなる検討が繰り返され、判断がごく難しい状況展開の中、何が最善と考え、どう減災にフィードバックされたか、そして、今後の火山防災体制強化に向け、気象庁がいま進めている取り組みなどを紹介する。

☆1955年兵庫県生まれ。東京大学大学院理学系研究科博士課程修了（理学博士）。気象庁に入り、気象研究所研究官をはじめ、地震・火山・津波関連の部署を歴任。伊豆大島、雲仙岳、有珠山、三宅島などの噴火活動に対する観測体制の強化や防災対応等を担当し、富士山ハザードマップの検討に参画。現在、火山課長として火山噴火予知連絡会事務局を担い火山観測・活動評価等の強化に努めている。

11:10～12:20（70分）

パネルディスカッション

コーディネータ 日本テレビ放送網報道局社会部担当部長

谷原和憲氏

パネリスト 静岡大学教育学部教授 小山真人氏

気象庁地震火山部火山課長 横田 崇氏

東京都立府中高等学校・前三宅高等学校教諭

青谷知己氏

三宅村消防団長（場合により代理）平松一成氏

◎2000年6月末から9月頭間の「人命を守る」ための情報と避難対応を率直に検証する。科学的な火山監視観測・予知の限界と離島条件からくる対応の困難などを、専門的な視点から掘り下げる。例えば、帰島の際に盛んにリスクコミュニケーションが語られたが、噴火当時、島民が欲しながらも足りなかったのは何か、体験者である三宅島の方に加わってもらいつまびらかにする。反省点を、現在進行形の新たな噴火警戒レベル、火口カメラなど監視・観測体制整備、火山噴火緊急減災対策など防災対策に反映させることで、災害情報への信頼関係を取り戻し、今度、三宅島や伊豆大島、さらに各地で同様な災害が起きたときどうするか、どうできるか、課題→教訓→改善に向かう道筋をなるべく客観的に示して、火山噴火への備えに活かす。

（昼食60分）

■特別講演

13:20～14:00（40分）

講演 活火山地域における危機管理と共生
～2000年有珠山噴火を例にとって～
日本災害情報学会副会長・北海道大学名誉教授・
NPO法人環境防災総合政策研究機構専務理事 宇井忠英氏

◎噴火予知、長期避難、噴火の推移に応じた対策、次期噴火を見据えた復興、静穏期の心得などを概観し、総合的な視点から火山と麓に暮らす住民の共生にとって、何が重要なポイントとなるのか、1910年や1977-78年噴火の教訓が生かされた2000年有珠山噴火をひもときながら示す。

☆1940年東京都生まれ。東京大学大学院理学系研究科博士課程修了（理学博士）。東京大学理学部助手、米国オレゴン大学火山研究センター研究員、山形大学理学部講師、神戸大学理学部地球科学科助教授などを経て、北海道大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻教授で定年退職。現在、特定非営利活動法人環境防災総合政策研究機構専務理事。専門分野は、火砕流・火山体崩壊・火山災害・火山防災。

■第2部 避難から帰島へ： 被災者生活支援のあり方

14:00～14:30（30分）

基調講演3 三宅島火山災害への東京都の対応
東京都総務局総合防災部副参事 齋藤 實氏

◎2000年6月に始まった三宅島噴火災害に伴い、同年9月に全島民が避難。予想を超える4年5ヶ月にわたる避難生活後の2005年2月、帰島が実現した。この長期避難下で村を支え続けた東京都のさまざまな取り組み、全国からの暖かい支援、高濃度火山ガスが差別的に続く中での帰島に向けた準備、復旧対応、復興に向けた思いなどについて、都民のいのちと暮らしを守る行政の立場から語る。

☆1951年福島県生まれ。1969年に東京都に入都。1995年4月～2003年3月、衛生局係長として、阪神淡路大震災や地下鉄サリン事件後の「救急災害医療対策」を担当。トリアージタッグの統一、災害医療活動マニュアル、検視・検案活動マニュアルなどの作成に携わった。さらに、新生児救急医療対策や保健所の災害対策などを担当。2003年4月～2006年3月にかけて、三宅支庁総務課長として、帰島に係る三宅島の現地対策本部業務等を担当。現在、総合防災部副参事（情報統括担当）として、都の震災復興対策や新型インフルエンザ対策、地域防災計画の見直し（避難者対策など）等に携わっている。単身赴任の時に思えた、趣味の島料理の腕前はプロ級。

14:30～15:40（70分）

パネルディスカッション

コーディネータ 大妻女子大学人間関係学部教授
干川剛史氏

パネリスト 関西学院大学災害復興研究所教授
山中茂樹氏

国土交通省九州地方整備局総務部長

東京都総務局総合防災部副参事 齋藤 實氏

地域包括支援センター保健師 小杉真紗氏

三宅島社会福祉協議会事務局長

（場合により代理）桑村健司氏

三宅島ふるさと再生ネットワーク会長・元三宅島

島民連絡会会長（場合により代理）佐藤就之氏

◎島外、分散、超長期の避難生活と災害保護（支援法）、ボランティア活動、帰島決断の局面を総括する。最も特徴的で故廣井脩先生も尽力されたところ。いつまで続くか誰もわからない長期避難という特殊性を踏まえつつ、ほかの災害と対比し、将来、どうすればより望ましいのを見出す。島しょ部の活火山を多く抱える東京では、数十年ごとに実際に起こり得ることを念頭に、制度的な面を含め、衆知を集めた討議をし、要請の提言へと結びつけたい。都が実施した追加支援策やボランティアの支援活動なども見逃さない。

（休憩10分）

■特別発表

15:50～16:10（20分）

発表 社会福祉の観点から見た三宅島の現状と課題
大妻女子大学人間関係学部人間福祉学科 学生

◎2007年5月に三宅島へ現地見学に行った学生5名が、そのとき学習した内容をまとめて、社会福祉の観点から三宅島の現状と課題についてプレゼンテーションを行う。

■第3部 復興に向けて： 三世代がバランスよく住める島へ

16:10～16:50（40分）

対談 これから三宅島で進めたいこと
大妻女子大学人間関係学部教授 干川剛史氏

パルシステム生活協同組合連合会・
21世紀型生協研究機構・研究員 五辻 活氏

◎島民にとって喫緊の切実な願いである経済的生活復興を、具体的かつ建設的に語る。例えば、全国草の根ネットワークを積極的に取り入れるなど、従来にも増して豊かな三宅島再興への道筋を探る。また、2000年6月、大量のマグマが三宅島から神津島に向かって、海底の岩盤を割り裂きながら走った。このエリア（フィリピン海プレート北端部）で何が起きているのか？、大学の研究室で先進的に調査研究されていることは、実は島の人々の明日の命運に直結する事象に他ならない。最新の知見を「現場」に引っ張ってきて、住民が共有し、ともに考える仕組みを作りたい。CGを駆使したビジュアルな学習拠点・観光拠点として、三宅島「火山・プレートミュージアム」を提案する。

■閉会

16:50～17:00（10分）

挨拶 シンポジウム実行委員長・
大妻女子大学人間関係学部教授 干川剛史氏

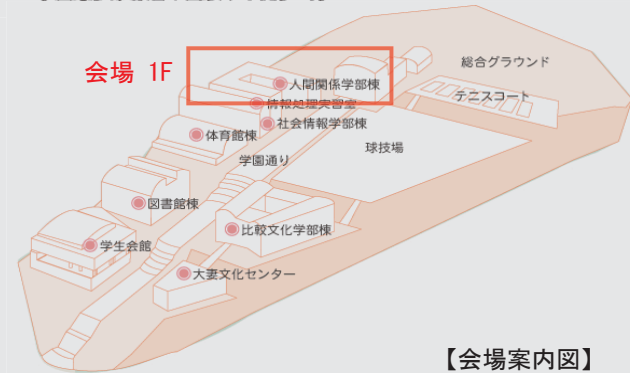


所在地 〒206-8540 東京都多摩市唐木田2丁目7番1

TEL 042 (372) 9988

交通アクセス

小田急多摩線唐木田駅下車徒歩5分



【会場案内図】

お問合せ 日本災害情報学会事務局

tel: 03-3359-7827

fax: 03-3359-7987

tokio@jasdis.gr.jp 〒160-0011

東京都新宿区若葉1-22 ロイヤル若葉505号室

http://www.jasdis.gr.jp/